

國學院大學學術情報リポジトリ

〔書評〕 南方熊楠著、杉山和也・志村真幸・岸本昌也・伊藤慎吾編 『熊楠と猫』

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田村, 義也, Tamura, Yoshiya メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000501

〔書評〕

南方熊楠著、杉山和也・志村真幸・岸本昌也・伊藤慎吾編

『熊楠と猫』

田村義也

ネコが人の心をそそるところは、まさに彼女が人間と深い関係を結ばず、「…」妥協のない独立心を保っている点にある（コンラート・ローレンツ『人イヌにあう』）

南方熊楠の猫好きは、その読者の間ではよく知られている。古くは、初期の熊楠評伝である中山太郎著『学界偉人 南方熊楠』（一九四三年）が、ロンドン時代の熊楠がとほしい食事をネコと分け合っていたという本多光太郎の回想（本書では三七頁に紹介）を伝えている。

南方君は非常に猫を愛して「…」猫だけは手放さず飼

つてゐた。猫に食物を遺るのに「…」先づ君が口の中に入れて十分に咀嚼し、栄養の含まれて居る汁は自分が嚥下して、残り滓だけを猫に与へると云ふ方法で、一人前の食事で、自分と猫と二人分の間に合せる「…」

近くは一九九一年から二年にかけて、熊楠に共感の深かった水木しげるが連載した『猫楠 南方熊楠の生涯』（創作だが、現在もとてもよく読まれている熊楠評伝だろう）では、人語を解する猫が熊楠のそばに常について、物語の進行役をとめている。熊楠が猫と通じ合っていたという設定は、常人の枠組みを逸脱した「超人」という熊楠像となじみがよかったのだろう。水木しげるが熊楠を描いた漫画作品は、夙く一九七三年の「快傑くまくす」にさかのぼるが、このときすでに、自分が咀嚼したあとの肉を猫に分け与える情景が、熊楠の為人を紹介する逸話として、冒頭近くで描かれていた。

熊楠はその学術的知見や思想を、公刊する文章ではなく私信書簡に記すことが多かったひとだが、学術的な論述の中で、ものの喩えに猫を登場させることがたびたびあった。一九二五年に熊楠が記した、「履歴書」と通称される自叙伝（一月三十一日付の矢吹義夫宛て書簡）によれば、ロンドンで彼が英誌『ネ

イチャ』に初めて論文（「東洋の星座」The Constellations of the Far East, *Nature* 1893.10.5）を投稿した際、大英博物館の長老館員オーガスタス・フランク스에校正刷を見てもらう機会があったが、このとき南方は、彼の未熟な英語についてフランクスから教示を受けたという（全集七巻一四頁）。outlineとsketchを辞書ではシノニムとしているが、使い方が違う（はっきりした輪郭 definite outline と言ふことは出来るが、definite sketch と言わない）と注意されたというのだが、三十三年前の出来事を回想して記す中で熊楠は、両語の違いを、二匹の猫を描いて、曖昧な破線の図Aと明瞭な輪郭線の図Bとによって図示している（本書一九頁に紹介）。

また、比較的新しく学界に紹介された資料としては、高野山真言宗の高僧土宜法龍へ宛てた書簡のうち、二〇〇四年に梅尾山高山寺（京都市）で発見されたものの中で南方が、猫の顔や身体を図示して、大日如来の身体に包摂される世界のあり方を説いた下りがある（一九〇二年三月二十三日付、『高山寺蔵南方熊楠書簡』二五五頁、本書六二頁に紹介）。大猫のなかに中猫が含まれ、さらにその中に小猫がいるという入れ子の猫図は、研究者の間で「猫大日」と呼称されているという。

このように、南方熊楠が愛した動物の第一は猫であり、彼の

記した文章（公刊論考および私信書簡）の中で、猫の占める位置は特別である。本書は、「比較文化史、日本近代史、日本文学」（本書一七三頁「おわりに」）と、複数の専攻にまたがる四人の研究者（编者として冒頭にお名前を挙げた）が、それぞれの立場から、南方熊楠と猫の関わりを探求した資料集および論考である。

この『熊楠と猫』は、南方熊楠顕彰館（和歌山県田辺市）で二〇一五年に行われた同題の企画展のための調査を基礎とし、その際の展示内容を軸として編輯された（「おわりに」）。同館は、熊楠の唯一の遺族だった令嬢南方文枝氏（二〇〇〇年没）より、南方邸および熊楠の遺した蔵書・資料の一切の遺贈を受けた田辺市が、旧南方邸北隣の敷地に二〇〇六年に設立したもので、南方熊楠の自筆資料および関連資料・文献多数を所蔵する機関である。本書の编者四氏は、ごなたも南方熊楠を（狭義の）「専門」とされる方ではなく、それぞれの専攻において研究をされてこられ、業績を発表されている。そうした方々が、南方熊楠をテーマとする施設における企画展を担当されたのだが、実は南方熊楠顕彰館の運営に助力をしている外部の協力研究者（本稿筆者もその一人なのだが）は、ほとんどの方が、ご自身の専攻があり、そのうえで南方熊楠「にも」取り組んでいる、とい

う関わり方をされている。

これは、人文系の文献研究から野外での生物採集まで領域横断的な活動をした南方熊楠という人物が、研究対象としてはいまだにその位置づけが明確でないという状況の反映でもあるが、同時に南方熊楠という多面的な学者・思想家への学術的取り組みが、必然的に学際的なものとなるという意味でもあろう。

南方熊楠顕彰館の活動を通じて、基礎資料の蒐集・整理および読解・分析を進め、それに基づいて南方熊楠像を再構成するという問題意識を、同館の協力研究者は共有している。そして、南方熊楠顕彰館発足から十年目の年に、それまでの営みの蓄積の上に、自身も猫を愛する研究者たちが、その自らの猫への愛をバネとして、南方熊楠と猫とのかかわりの全体像を把握しようとしたのが、右の企画展の試みだった。本書はそうした、熊楠の自筆資料への強い関心の上に成り立っており、故に、敢えて「著者」として南方熊楠自身の名前を筆頭に掲げている。収録された熊楠の文章は、未刊書簡の翻刻紹介や全集未収録の雑誌論考をふくみ、編者らの探索は、熊楠の家族が飼い犬ボチとともに撮った写真（本書二〇頁）や、熊楠生前の庭と思われる場所で行っている猫の写真（八八頁）を、南方邸資料のなかから発掘するまでに及んでいる。

本書には、相当数におよぶ南方熊楠自筆資料の写真が掲載されている。日記・研究ノート・書簡といった、公刊目的ではない文書類の中に、熊楠がこれほど多くの猫図を描いていたことが、熊楠が興味深い、南方邸外で保存されてきた個人蔵の資料を含め、これだけの熊楠自筆猫図を数え上げた努力は、賞賛に値しよう。

早くは一八八九年（アメリカ滞在中）の手書き回覧雑誌「珍事評論」から、晩年の一九三一年六月七日付岩田準一宛て書簡までの長きにわたって、南方がさまざまな機会に描いた猫図が網羅されており、その中には、ロンドン時代を回想した「ロンドン戯画」（一九〇三年二月一日付多屋高宛て葉書、本書三三頁）や、熊楠自身が「福猫」と呼んだ幸運の猫を主人公とする一連の俳画（一九二五年一月の三通の小畔四郎宛て未刊書簡、五二頁以降）など、熊楠の伝記研究上も興味深く、また「猫度」の高さに敏感な読者の心を揺さぶるような猫画が含まれている。日記の中でも熊楠は、自分の代わりに妻松枝に添い寝する猫の姿を、何と描きとめていたりするのである（一九〇七年三月一三日、『南方熊楠日記』三卷九六頁、本書三五頁）。

本書の白眉は、右の一九二五年の一連の俳画書簡をめぐって、

その背景を歴史研究的に解明した第三章と、それらを含む熊楠の猫句を俳諧文学の系譜の中で検討した第四章であろう（目次は後掲）。特に後者は、俳人としての熊楠を論じた先行研究がほとんどなかった（磯辺勝『巨人たちの俳句』の熊楠の章が思い当たる程度である）中、貴重な試みである。そしてまた、熊楠という人物になじみの薄い読者（猫への関心から本書を手にとる方も多いことだろう）のために、南方熊楠その人についての紹介（過去の虚伝と最新の実証研究との異同を含む）や、背景としての猫の民俗史、関心を深めたい読者のためのブックガイド、また猫に焦点を当てた熊楠の年表など、配慮をつくした構成となっている。

研究書の形式ではないため、紹介されている未刊既刊の自筆資料（熊楠の日記や書簡など）が、どのように参照出来るのかなどが、熊楠研究者以外の一般読者にはわかりにくい憾みはあるが、一次資料を探索していく研究者の情熱と、猫へ寄せる無償の愛情との交錯から産まれた本書は、南方熊楠研究の最前線からの報告として、また一風変わった角度からの南方熊楠入門として、独自の存在感を持つといえそうである。惜しむらくは、一次資料の「南方濃度」が高く、熊楠になじみの薄い読者には取り付きにくい印象を与えかねないきらいがあるが、あたたかも

その点を埋め合わせるかのように、編者らは積極的に「南方熊楠と猫」パネル展を、各地で開催する努力を続けている（高円寺・二〇一八年六月、平井・二〇一八年八月、山梨県甲斐市・二〇一八年十二月―二〇一九年一月）

目次

- 第一章 南方熊楠ってどんな人？
 - 第二章 熊楠と猫のエピソード
 - 第三章 熊楠の猫の絵
 - 第四章 熊楠の猫の俳句
 - 第五章 南方邸と周辺の猫たち
 - 第六章 南方家のペットと猫たち
 - 第七章 猫に関する論考
 - 第八章 現代語訳「猫一疋の力に憑って大富となりし人の話」
 - 第九章 熊楠の猫論考三点（付・現代語訳）
 - 第十章 論考を読み解くための猫知識
 - 第十一章 ブックガイド 熊楠と猫についてもっと知ろう！
- 参考資料 年表・熊楠と猫のあゆみ／猫に関する論考一覧
（A5変判、一七六頁、共和国、二〇一八年四月発行、
二二〇〇円＋税）